



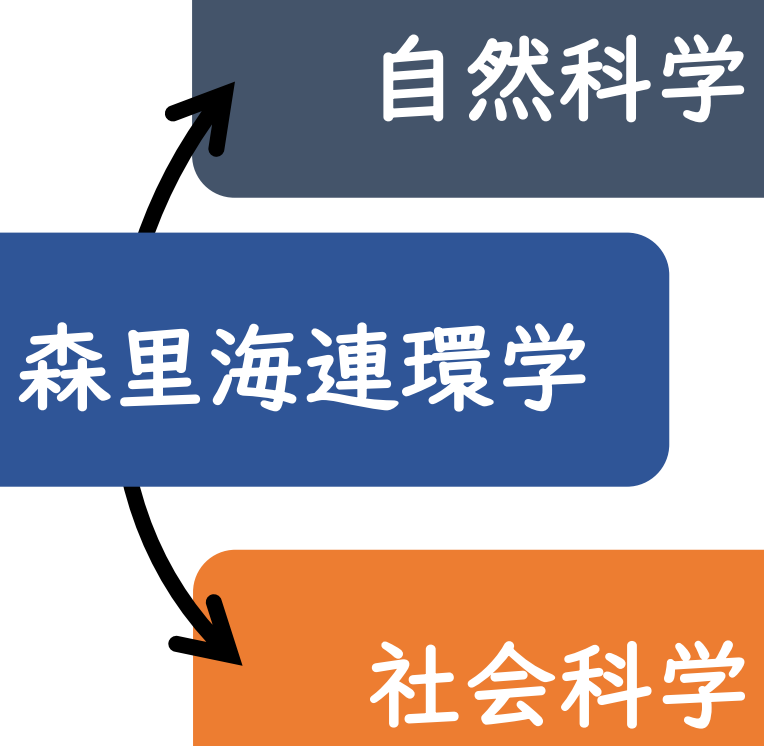
京都大学
森里海連環学教育研究ユニット

森里海連環学教育研究ユニット Link Again プロジェクト研究体制図

- 森里海と海とのつながりはどうなっている?
- 豊かな海とは?
- つながりと分断のしくみはどうなっている?
- 人びと・社会は森里海連環の実現のためにどうしたらよいか?

- 時空間情報・GIS解析 (地球環境学)
- 時空間データベース (国立環境研究所)
- 生物多様性 (北大・水産科学研究院)
- 生態学的メカニズム (フィールド研)
- 漁業生産・環境 (フィールド研)
- 基礎生産 (総合生存学館)
- 確率推論 (生態学研究センター)
- 物質循環 (フィールド研)
- 防災研究 (地球環境学)
- 政策形成 (農学研究科)
- 社会連携 (フィールド研)
- 影響評価 (人間・環境学研究科)

全国32河川の環境DNA採集など



企業との連携による学生教育



たねやグループ(たねや・CLUB HARIE)の主要施設「ラコリーナ近江八幡」内に、「京都大学 森里海近江八幡分校」があります。私たちのユニットでは、ここを研究拠点として、2014年から同社や地域づくりの担い手と共に、**森(八幡山)一里(農村集落・城下町地区)一海(西の湖・琵琶湖)の連環**と地域の自然・歴史文化の継承を目指した研究や大学院生の実習を行っています。学生実習では、水質や生物相の調査、歴史の中で変化してきた**生業やライフスタイル**についてインタビューを実施し、持続可能な森里海連環のための実践案を作成するグループ課題に取り組みます。

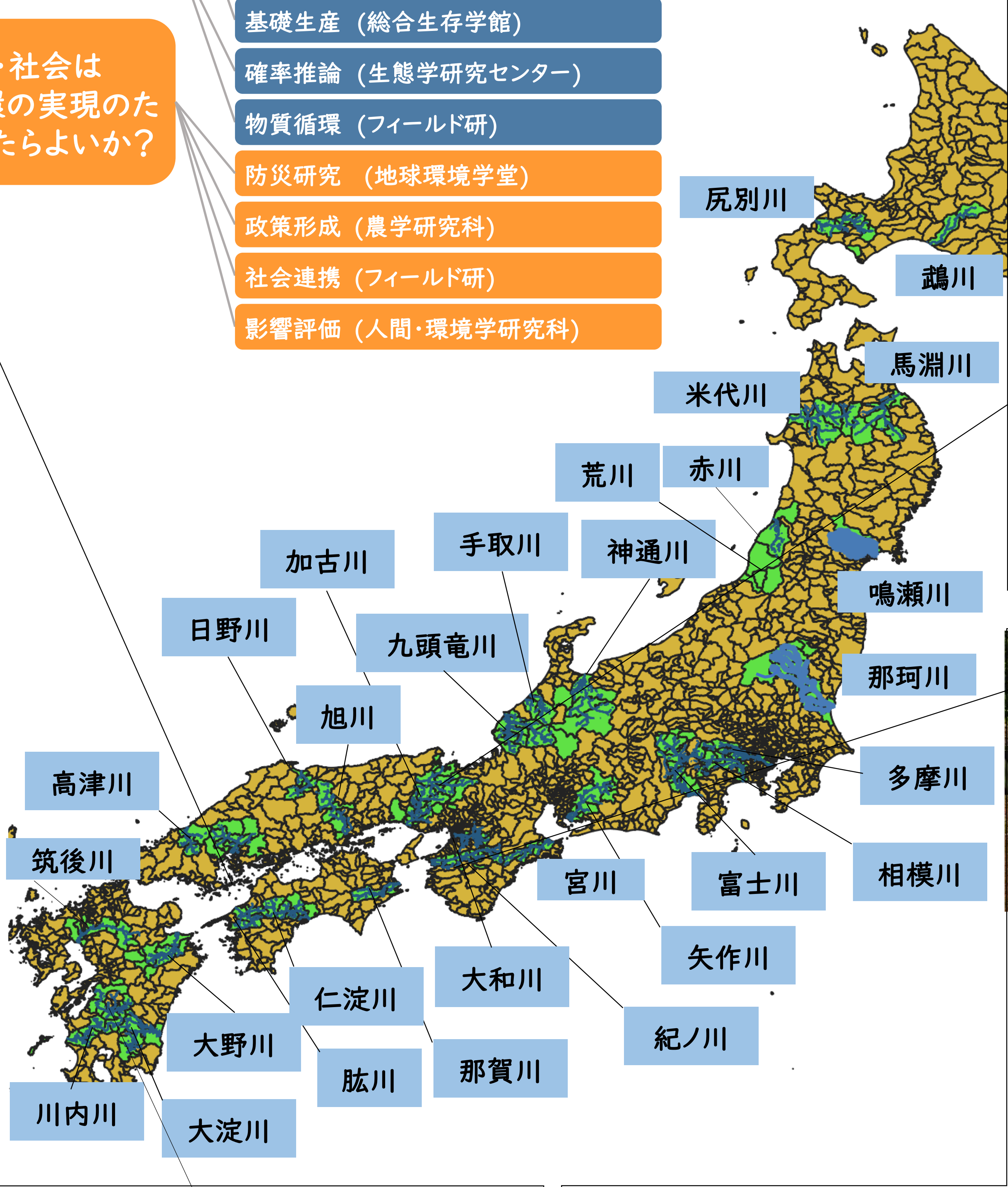
地域に聞く 太田川

太田川一広島湾流域圏は、1960年代初めから西日本有数の**工業地帯**として発展、また古くから国内最大規模の**マガキ養殖**もおこなわれています。近年、著しく低下している太田川一広島湾流域の自然資源を持続的に利用していくにはどのように環境とつきあっていけばよいのでしょうか?



熊本県が発電専用ダムとして、球磨川に建設した**荒瀬ダム**が**完全撤去**されました。ダム撤去を契機とした**森里海**のつながりの再生が始まったばかりの地域です。

森里海



有田川 釣り人との協働



自然は私たちみんなにとって大切なものですが、付き合い方は様々です。例えば、川は**飲み水**や**農業・工業**に使う水の供給源ですが、釣り人にとっては**釣り**を楽しむ場です。地域の人々は魚だけでなく**景観**も末永く続くようにと願います。

このように生み出される**生態系サービス**を支える**生物多様性**を研究者は調査し実態を明らかにします。プロジェクトでは、そのような異なる立場の人たちが、それぞれの思いを理解しあい、望ましい溪流の姿を共有し、そのための自然との付き合い方を見つけるために、釣り人も**シチズンサイエンティスト**として調査を行っています。有田川のアマゴのDNAを調べ、天然アマゴの探索と、持続的な溪流管理を目指した活動が進んでいます。

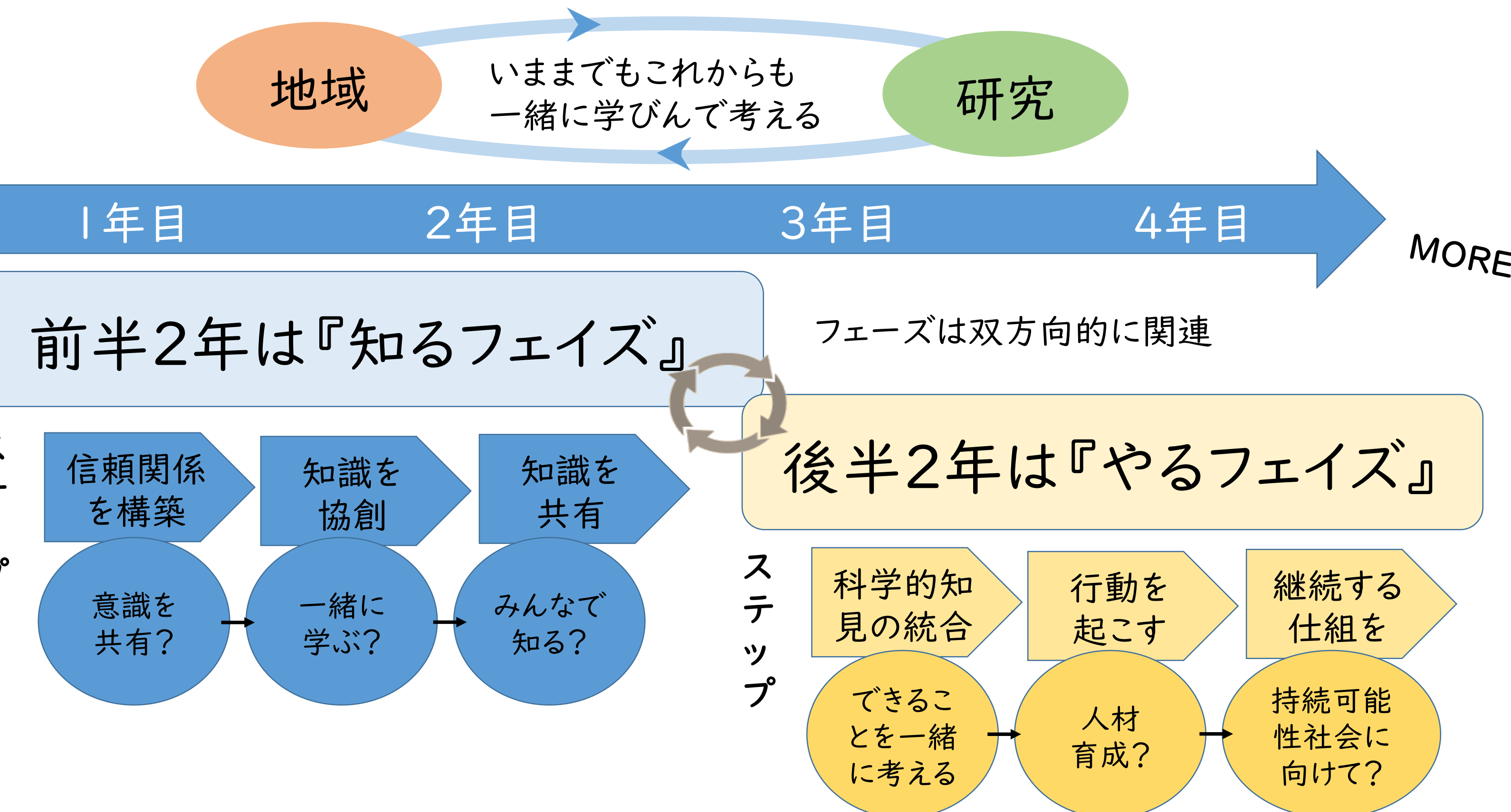
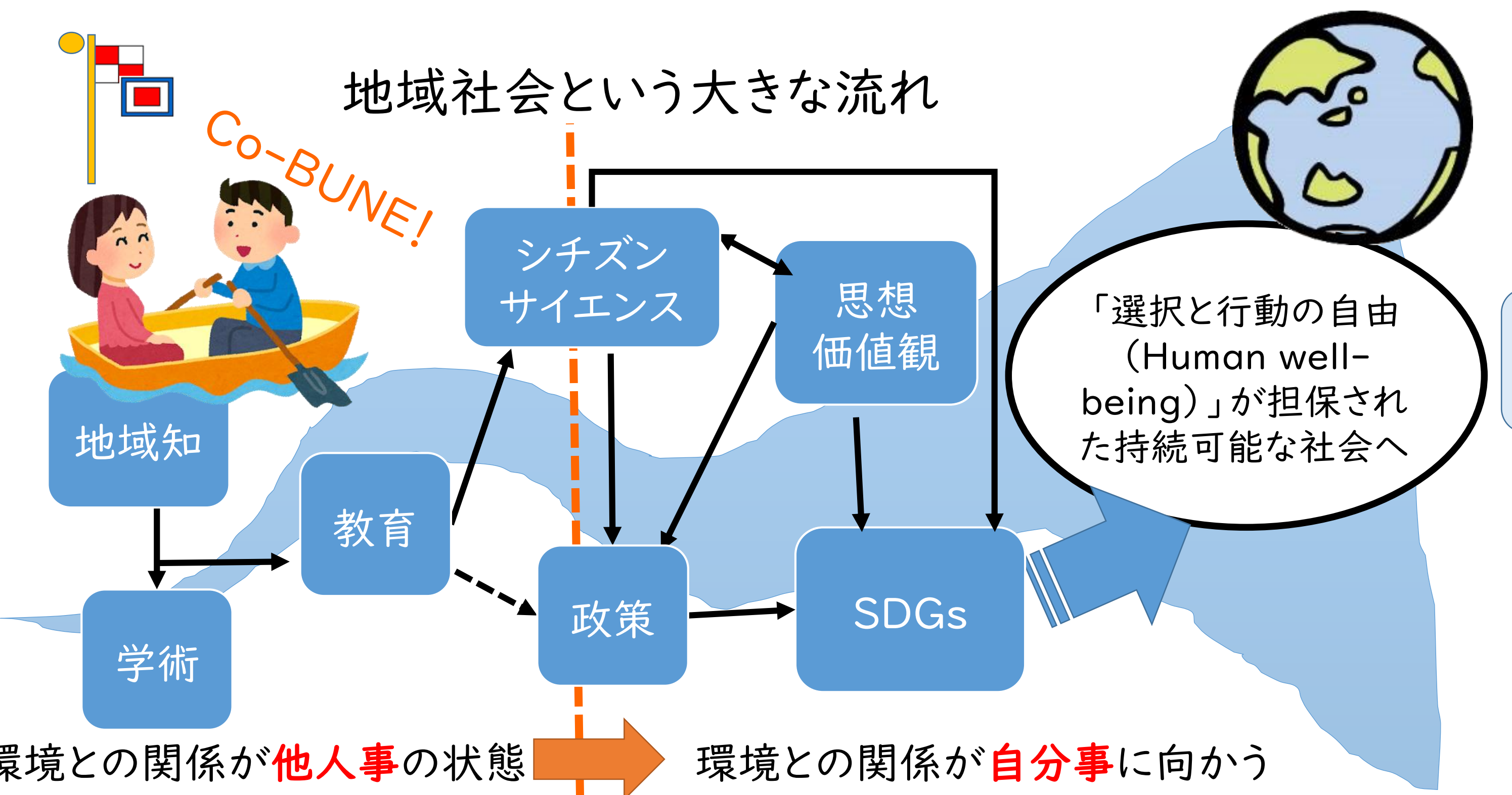
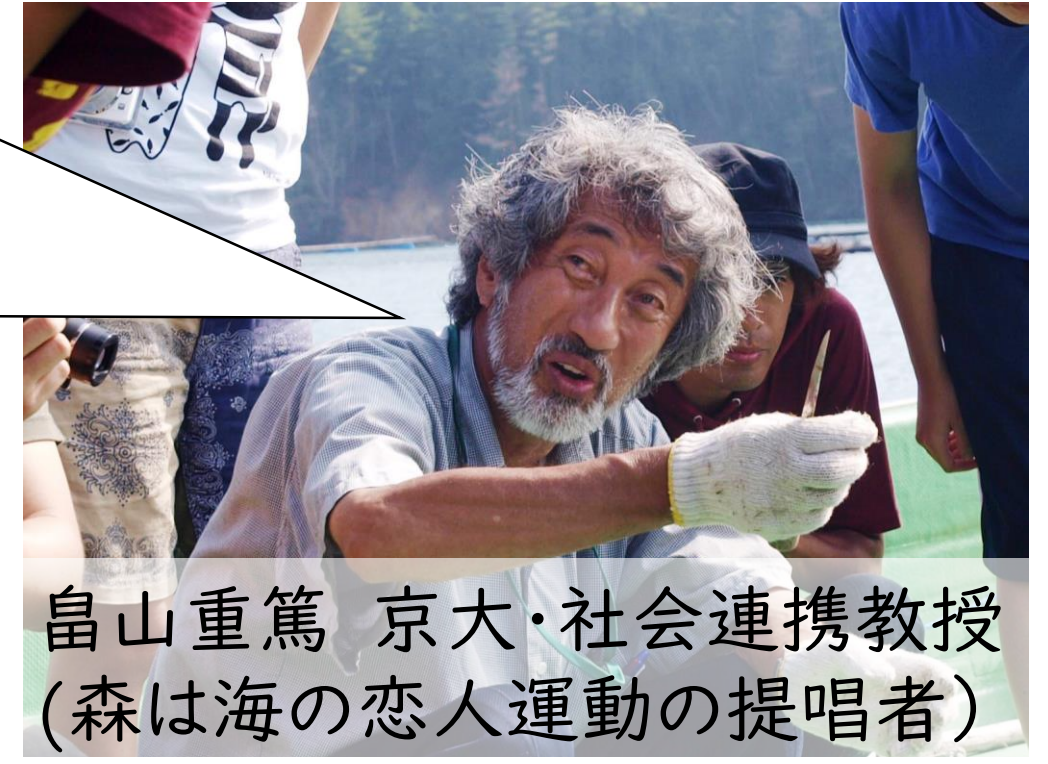
「みんなで生きていこうよ」というつながりの共有意識は、地球生命体の免疫系に相当するものと考えられる。

それはあたかも現代社会では経済価値として換算されない思想や価値観のようなものであり、この点で「森里海連環学」は哲学的要素を多分に備えた学問といえる (田中克、2008)。



「森里海連環学」は、大学内の学問だけでなく、住民が人と人、人と自然、自然と自然のつながりのたいせつさに思いをはせ、人々が「力を合わせてみんなで生きていこうよ」という意識を共有しながら住民が進化させていく学問である。

「気仙沼湾に注ぐ大川流域の環境の大切さをどう訴えるかである。事を起こすにはスローガンが要る。環境問題は理系の問題だが、それを引き起こしているのは人間である。人間に訴えるには言葉の力が必要だ。」
(「森は海の恋人」が生まれた経緯について)



Co-BUNEプロジェクト(Co-Building of Unison Network with Environment, 「森里海」を縫いつなぐ川の流れのイメージから、私たちが新しい時代へ漕ぎ出すためのプロジェクトコンセプトに小さな舟を連想させました。

発表者: 赤石大輔¹、清水夏樹¹、清水美香¹、法理樹里¹、徳地直子²、石原正恵²
1) 学際融合教育研究推進センター 森里海連環学教育研究ユニット、2) フィールド科学教育研究センター
2018年9月22日京都大学アカデミックデイ、ポスター発表「森里海と私たちのつながりを捉え直そう」

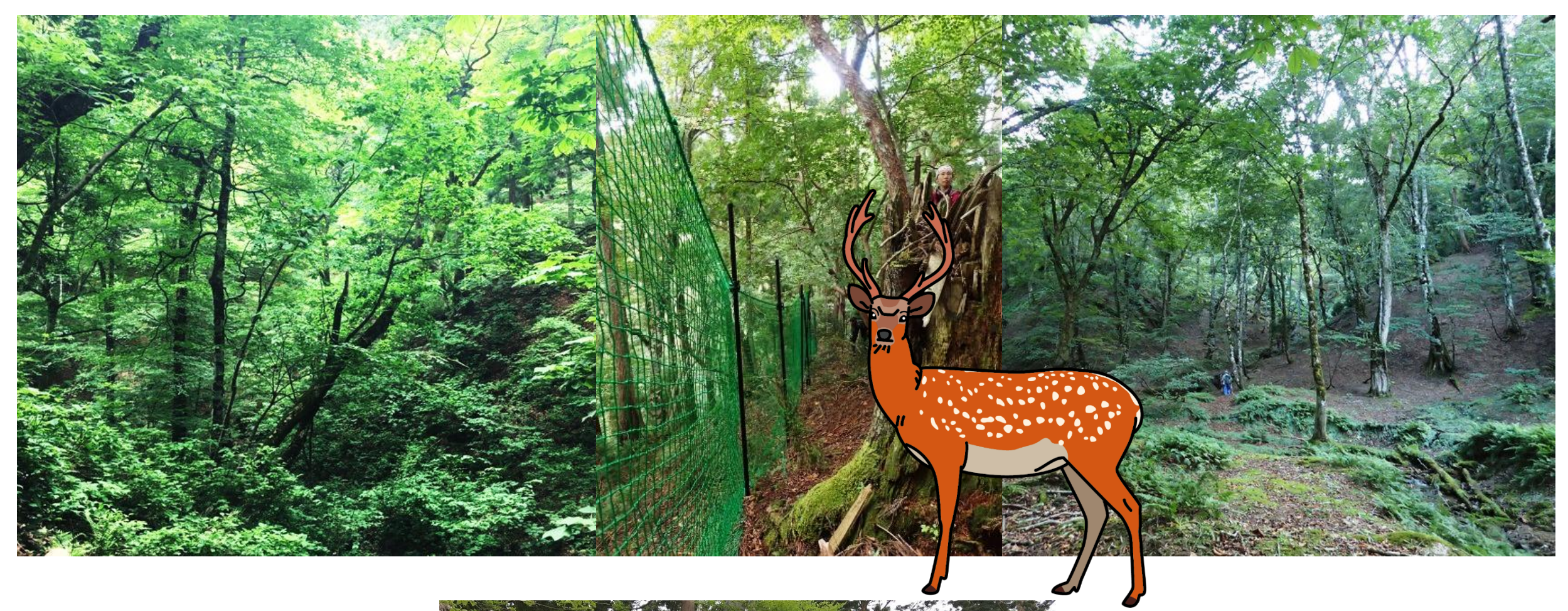
市民との協働、対話の場づくり

「由良川の源流」を守る芦生の森で、京都大学は約100年間研究を行ってきました。新しい時代に向けて、大学が地域の方々と共に森を守り、地域の活性化につなげていくための協働取組が始まっています。



①シカから森を守る

20年ほど前からシカの食害による林床植物の減少が著しく、森林や由良川への影響も確認されています。さらに地域の方による山村活性化の取組の障害となっています。今後いかにシカの影響を抑え、森を回復させるか、多様な研究者と地域との協働を進めようとしています。



②森里海を学ぶ、エコツアーの開発

芦生の森は京都市内から比較的近く、貴重な自然に触れることができ、エコツアーに利用されてきました。エコツアーに森里海連環学の要素を盛り込むことで、より付加価値の高いツアーのプログラムを作る、ガイドと研究者の協働取組を検討中です。



③森とレジリエンスを学ぶ、京と森の学び舎。

森里海連環学の根底になる学びとして、既存の枠を超えて「森とレジリエンス」に関わる新しい取り組みを展開しています(森とレジリエンス学校、京都 commons の創造等)。さらに「京と森の学び舎」を新たに設け、京都を核としてより多くの、多様な世代の人々と共に学ぶ場を築いていきます。

